

博士論文要約

一般外科病棟における後期高齢者の術後回復を促進する熟練看護師の卓越したわざ The Expert Nurses' Art of Care on Promoting Postoperative Recovery of the Older-old in General Surgical Wards

今野玲子

Konno, Reiko

I. 序論

入院期間の短縮化と手術患者の高齢化は、日本の医療現場の課題となっている。後期高齢者は個人差も大きく、術後の循環動態は不安定であり、その看護には成人を基準にしたスタンダードケア通りにはいかない困難さが伴う。その中で、周手術期看護の経験を積み重ねた熟練看護師は、術後回復を促すスタンダードケアを越えたケアを実践しているのではないかと推測される。しかし、熟練看護師による後期高齢者の術後回復を促進するケアがどのように展開されているかは、明らかになっていない。多くの熟練看護師は自分が普段行っている周手術期の後期高齢患者の看護について深く意識化しておらず、その実践内容を言語化することは難しい。そこで、個人差もあり依然として未知の部分も多い後期高齢者の術後回復を促進するケアが、臨床現場でどのように実践されているか、熟練看護師の実際の援助場面の参与観察を手掛かりに明らかにしたいと考えた。

II. 目的

この研究の目的は、熟練看護師が臨床経験を積み重ねることで修得し、認識しながら、あるいは認識せずに実践している周手術期にある後期高齢者の術後回復を促進する卓越したわざを、一般外科病棟の文化のコンテキストの中で明らかにすることである。

III. 方法

本研究の研究デザインは、エスノグラフィの手法を参考にした質的記述的研究である。日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会（承認番号 2016-76）及び、研究施設の承認を得て実施した。フィールドは、2つの一般外科病棟である。外科系の看護に携わった期間が5年以上の熟練看護師7名を研究参加者とした。参与観察では、75歳以上の後期高齢者の術後回復を促進する熟練看護師のケアに焦点をあてた。参与観察に続いて、術後の回復を促すケアを再構成し、インタビューを実施した。インタビューでは、Schönの「行為の中の省察（reflection in action）」と「行為についての省察（reflection on action）」という考え方を参考にした。フィールドノートおよびインフォーマル・インタビューとフォーマル・インタビューは質的記述的に分析し、後期高齢者の回復を促進する熟練看護師の卓越したわざを描写する主要なテーマに沿って再構築した。

IV. 結果

研究参加者7名から同意が得られ、参与観察とインタビューを実施した。研究参加者の外科系の臨床経験年数は6年から18年であった。研究参加者（看護師）が関わっていた後期高齢者は、70歳代後半から80歳代後半で、男女各3名、消化器系の手術を受けた者が5名で、呼吸器系の手術を受けた者が1名であった。

1. 一瞬をつかみ、回復の妨げとなる状況を取り除く

熟練看護師は、一般外科病棟における病棟の流れの中で、様々な看護業務をしながらも時間を作りだし、一瞬をつかみ後期高齢者の術後回復の妨げとなるような状況を取り除くよう関わっていた。ナースステーションで作業をしていた熟練看護師は、レントゲン技師が担当の後期高齢者の撮影に来たのを察知して様子を見に行った。技師の声掛けが聞こえていないことを把握し、短い時間を作りだし、もう少し大きな声で話しかけるよう助言することにより、不意に体を動かされることによる痛みの増強を防いでいた。また、術後に食事ができない理由を口頭で説明した後も、食事が気になり落ち着かない様子に陥っている後期高齢者の様子を、ナースステーションで他の作業をしながら捉えた。今、食事が取れない理由だけでなく、いつから食事が始まるかの「見通し」を書いたメモを渡す数分の時間を作り出すことで、後期高齢者の気持ちを落ち着かせていた。

2. 術後の自分の状況が「ようわからん」後期高齢者に回復の道筋をつける

周手術期にある後期高齢者は、多くの人が入り出る煩雑さのなかで、ベッドに仰臥位で横になり、様々なチューブ類等につながれている状況であった。後期高齢者はこの状況を「ようわからん」と表現し、混乱や苛立ち、緊張を生み出していた。熟練看護師は、後期高齢者の「ようわからん」というつぶやきを拾い上げ、向き合い、その思いを大切にしながら、ユーモアや笑いをを用いて場を和ませていた。また、術後の循環動態が不安定ですぐには歩行ができない後期高齢者に対しても、ヘッドアップをしたり、車いすに移乗させたりと、少しでも臥床した状態から抜け出せるようにと働きかけていた。それにより、後期高齢者の視界が広がり、見えるものが変わってくることを認識した上での関わりであった。自分の状況が「ようわからん」と何度もつぶやいていた後期高齢者が、離床で病棟の廊下の端まで歩いた際、そこから窓の外を見て「桜、咲いてるね」と言った。手術が無事に終わり、外を見て桜が咲いている季節を感じることは、後期高齢者にとって「ふつう」の日常を取り戻す一歩となる。これは、後期高齢者を、術後の「ようわからん」状態から回復へとつなぐ道筋をつける熟練看護師の卓越したわざであった。

3. 無理をさせず「ぼちぼち」体を慣らし、探りながら離床を進める

後期高齢者は、成人患者に比べ循環動態が不安定で、スムーズに離床が進まないことも多かった。熟練看護師は、そのような後期高齢者の術後の複雑な全身状態を把握しつつ、各々の回復のペースに合わせて「ぼちぼち」体を慣らしてもらい、離床を止めるのではな

く、できるところから進めていた。離床の際も、実際に起き上がりや立ち上がりの動作、そして歩行中の様子の変化などを観察しつつ、探りながら後期高齢者にできそうな離床の範囲をためしていた。離床を焦っている後期高齢者には、術前とは違う身体を実感してもらい、無理のない活動をしてもらうよう関わっていた。

4. 後期高齢者を無理なく自然に流れにのせる

熟練看護師は、めまいを感じてベッドに横になろうとした後期高齢者に対して、「座っていきましょうよ」と声をかけ、背後から聴診し血圧を測っていた。普段から血圧を測る習慣があり、その結果にも関心があった後期高齢者は、自動血圧計の値に関心を寄せはじめ、無理なく座ることができた。また、日頃から何かにつかまって立ち上がるという動作をしていた後期高齢者に対して、術後の離床の際に、多くの説明はせず、歩行器というつかまるものを前に置くことで、習慣的な動作を使って無理なく立ち上がってもらい、自然に離床への流れにのせるような状況を作っていた。

5. 後期高齢者の普段の生活をたぐりよせ、術後の今とつなげていく

熟練看護師は、後期高齢者のつぶやきを聞き流さず会話を続けることで、入院前の生活を探り、散歩に行ったり、山に行ったりしていたというその人らしさを引き出していた。また、身体的苦痛が取れて、意識が生活に向けた効果的なタイミングをつかんで、持ち物の話題から趣味について語ってもらうなど糸口を探り、生活を引き寄せ、術後の今とつなげていく機会をつくりだしていた。さらに、「また山に行けるようになるため、今日から歩く練習をしましょう」と退院後の生活の目標と術後の今を結び付けることにより、後期高齢者の離床を動機づけていた。

V. 考察

1. 状況を察知し予防的な関わりの一瞬を作り出す：熟練看護師は、一般外科病棟の様々な年代の患者が存在する中で、意識を患者に向ける志向性において、成人と後期高齢者を同等にしていなかった。例えば、せん妄に関連する後期高齢者の行動に関しては、敏感に反応し、予防的に問題が悪化しないように働きかけていた。つまり、一般外科病棟では、後期高齢者に回復を妨げる何かがありそうだと感知すると、介入の必要な一瞬を捉えて、即座に行動を起こし、また通常の業務に戻ってくるということが繰り返されていた。これは、一般外科病棟における熟達した看護の一つと考えられた。

2. ユーモアや笑いをを用いて雰囲気を変える：一般外科病棟では、場の煩雑さが混乱や不安を招く可能性や、手術という治療が、ともすれば生命を脅かすクリティカルでシリアスな状況を引き起こす可能性があった。また、後期高齢者によくわからない状態が続くと、せん妄へと移行する可能性がある。熟練看護師のユーモアや笑いをを用いて場を和ませ、緊張をほぐし、明るい雰囲気に変える関わりは、後期高齢者が自己を取り戻すことを支え、

回復を促進する卓越したわざであったと考えられる。

3. 視野や空間、意識を拡げる意味：術後臥床している後期高齢者にとっての空間は、カーテンで仕切られた小さなスペースで、自身の存在や感覚さえも曖昧な状態にある。自分の状況が「ようわからん」と何度もつぶやいていた後期高齢者は、離床時に窓から外を見て、桜や、向かいのビルの様子に興味を示した。このように、離床の際に窓から外をみるゆとりをもたせる熟練看護師の関わりは、後期高齢者に季節や病院の外の様子を感じさせるものであり、視野や空間、意識を拡げることにつながる支援であることが示唆された。視野や空間や意識を拡げることは、非日常的な術後の状態から、季節や日常に目を向け、自己の感覚と自分を取り戻し、その後の生活へ意識をつなげる意味があると考えられる。

4. 習慣的な動作の活用と導き：術前に手すりなどにつかまって歩くという情報から、歩行器を前に持ってきて歩行を促す熟練看護師の関わりは、アフォーダンス（affordance）理論（Gibson, 1966/2011）で言われているように、行動をスムーズにし、後期高齢者を無理なく自然に離床へと導くものであった。言語的なアプローチだけでなく、その人の今までの習慣的な動作を捉え活用することは、後期高齢者の衰えていく機能のみに注目するのではなく、その人の培ってきたものを生かすことになる。後期高齢者が慣れている立ち上がりや歩行の方法を導き出し、それを刺激し、行為がうまくいく状況を作り出すことは、無理なく流れにのせることにつながり、回復を促すケアとなっていることが示唆された。

5. 生活をたぐりよせ、過去、未来、現在を結びつける：入院期間の短縮から、看護師が術前の患者と関わる時間は短い。加えて、術前の患者は手術に対する不安もあり、入院前の日常について、看護師とゆっくり落ち着いて話すような状況にはない。術後ケアのさりげない会話の中で、山歩きのようなその人らしい生活を引き出し、今の状況と結びつけ、退院後の目標へとつなげる熟練看護師の支援は、後期高齢者にとって異文化の世界である一般外科病棟の非日常を、その人のそれまでの生活やこれからの生活と結びつけ日常に戻していく、術後回復の道筋をつける支援であることが示唆された。

以上のように、後期高齢者の生活や習慣的な動作をとらえて活かす熟練看護師の卓越したわざは、後期高齢者に関心を寄せ寄り添う姿勢があるからこそ成されるケアと考える。

VI. 結論

一般外科病棟における後期高齢者の術後回復を促進する熟練看護師の卓越したわざは、状況を察知し予防的な関わりの一瞬を作りだし、ユーモアや笑いをを用いて後期高齢者が自分を取り戻すことを支えるものであった。また、熟練看護師は、後期高齢者の習慣的な動作を用いて、その人の培ってきたものを生かし、限られた時間で、対象の生活をたぐりよせ術後の今とつなげる、スタンダードケアを越えたその人に寄り添った卓越したケアを実践していた。